



INTERVIEW

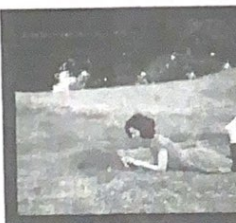
佐伯 MARI SAEKI 真梨

photo by Mitsukatsu Obayashi

取材：菅野聖
写真提供：佐伯真梨 / ラグインターナショナルミュージック

演奏者であると同時に作曲家ですと 胸を張って言えるように活動を続けたい

ピアノ・トリオによるジャズと、ヴァイオリンやマリンバなどによる現代音楽の2枚組作品で2011年にアルバム・デビューを飾り、高い評価を受けたピアニスト/作曲家、佐伯真梨。その彼女が、オリジナル楽曲によるジャズ・アルバムを完成させた。ジャズ・ピアニストであるとともに作曲家でもある佐伯に、この2ndアルバムについて、そして作曲へのアプローチやジャズに対する意識などを聞いた。



レイン・グラス

佐伯真梨

ラグマニア(Ragmania) XQCJ-1010 6月19日リリース

●収録曲 1 ティーフ・ラビリス 2 レストレスネス 3 Kira-Kira☆ 4 クロマティック 5 ジェントル 6 マホロシ 7 フラジャイル 8 リレーションシップ 9 レイン・グラス 10 トライアンクル 11 フェイス 12 ディセンバー24

●パーソナル ● 佐伯真梨(p)、坂崎拓也(b)、柴田亮(ds)

●作曲 ● 佐伯真梨(3を除く全曲)

■作曲能力の芽を見せるオリジナル楽曲をメインに、レギュラー・トリオでレコーディングされた2ndアルバム。

「レイン・グラス」は2歳の娘との 思い出が詰まった非常に印象深い曲

——出来上がった2ndアルバム「レイン・グラス」は、「きらきら星」をアレンジした「Kira-Kira☆」の他は、すべてオリジナル曲ですね。

佐伯：これまで書き溜めてきた作品の中から、今回のメンバーと演奏したい曲を選んでアルバムに入れました。9曲目に収録した「レイン・グラス」をアルバム・タイトルにしたのは、2歳の娘との思い出が詰まった、非常に印象深い曲だったからです。

——この曲は、キャンプ先で夜中にお子さんを追いかけていたら、煌めく芝生と出会った。その体験から曲が誕生したそうですが、他の作品もご自身の経験がモチーフになっていることが多いのでしょうか？

佐伯：そうですね。生きている上でのテーマや、生活している中で起こったふとした出来事がインスピレーションとなり、曲が生まれるケースが多いです。

——曲は突然思いつくタイプですか？

佐伯：寝ている時にメロディが頭で鳴っていて、うるさくて眠れず、急いで起きて夢中になって書き留めたこともあれば、あれこれ思い悩むこともあります。でも、連想ゲームみたいに、関連のある事柄に想いを巡らせていると次第に考えがまとまり、曲名のようなテーマが浮かんで、そこから音を探して拾っていく。そのパターンが基本になっていますね。

——新作でも、2枚組の1stアルバム「アナベル」ディスク1同様、坂崎拓也(b)さん、柴田亮(ds)さんによるトリオ演奏が収められています。彼らとの出会いを教えてください。

佐伯：坂崎さんは、14年くらい前に、私がジャズ・トリオで初めて演奏した時のベーシストでした。当時は、スタンダード曲を演奏するのが精一杯で、全く自分の意見や考えを言えず、坂崎さんについていくことすらできませんでした。それ以来、共演するチャンスもなく、まさかCDと一緒に作れるなんて私自身、全く想像もしていませんでしたので、人生というのは本当に不思議なことが起こるモノだと実感しています。坂崎さんは演奏が素晴らしいだけでなく、楽曲に対する解釈が非常に深い上、柔軟性に富んでいていつも驚かされています。音楽に対するヴァイタリティも目を見張るものがありますし、私が戦路に立った時、彼のひと言が背中を押してくれた、そんな経験も幾度となくありました。でも、多分、ご本人は気付いていらっしゃるかなと思いますけど(笑)。

——ドラムの柴田亮さんは？

佐伯：やはり、14年くらい前ですね。“とんでもなく凄いドラマーがいるぞ！”と、その時は雲の上の存在で。その後、渡米し、さまざまなキャリアを積まれて、さらにパワーアップしているのだろうと5年程前にラ

デを聴きに行ったんです。そうしたら予想通り、いえ、それ以上で、思わずレコーディングのお願いをしていました。それくらい、衝撃的でした。

—そんなメンバーとの、ピアノ・トリオでプレイする楽しさとは？

佐伯：自分の演奏がダイレクトにメンバーに伝わり、ひとりでは絶対に作ることでできない新しい色が生まれるということでしょうか。

—ところで、新作「レイン・グラス」は、イタリアの職人による手作りの高級ピアノ「ファツィオリ (FAZIOLI)」を使用してレコーディングしたそうですね。

佐伯：前作のマスタリングでお世話になった方にレコーディングの相談をしたところ、滋賀県栗東芸術文化会館「さくら」でファツィオリでの録音を何度もされているとお聞きし、ご提案もいただいたことで思い切って決めました。実は、ファツィオリを弾いたのは今回が初めてだったのですが、触れた瞬間、これまで演奏してきたピアノの感触とまるで違っていたので非常に驚きました。自分に近い所の手前で鳴っているのではなく、ピアノの胴体の部分の奥全体が鳴っている感じともいうか……。キラキラした音色でありながら、決してうるさくない所も好きなポイントです。同時に、ダイナミック・レンジが広いのも特筆すべき点だと思います。すべてにおいて、自分の弾きたいように弾ける、出したい音が出来る楽器だと感じました。

ビル・エヴァンスから入った ジャズへの道

—さて、佐伯さんが音楽好きになったのはご両親の影響が大きいかうかがいました。

佐伯：ええ。父がジャズ・ピアニスト、母が音楽講師をしていましたので、生まれた時から家には音楽が普通にあった、いえ、音楽しかなかったといっても過言ではない環境だったんです。ピアノも両親が教えようとしたようですが、全然言うことをきかなかったで別の先生のところで習わせたみたいです(笑)。

—それは何歳のころですか？

佐伯：6歳です。最初は電子オルガン、並行してピアノも始めました。ですから、決して早い方ではないし、もっと小さい頃から習いに行けば……などと思ったりしたこともありますが、実は、幼少時代にピアノを始めさせると音楽嫌いになるかもしれないと思った親の意向で、レッスンは6歳



坂崎拓也 bass



柴田亮 drums

MARI SAEKI

佐伯真梨 piano

真梨真梨家系。ピアニスト、作曲家。幼少の頃より音楽家の両親の影響で音楽に親しみ、ピアノ、電子オルガン、フルートなどを始める。大阪音楽大学音楽学部作曲学科卒業後は、クラシックを中心に多くの作品を作曲。2011年発表の2枚組デビュー・アルバム「アナベル」は、ジャズと現代音楽の両面を表現した作品として注目を集めた。ジャンルにこだわらず楽曲を書き下ろし、独自の感性で自らの音楽表現の可能性を追求し続けている。
<http://marisaeki.com/>



からになったようです。でも、こうして音楽の道に進めたのですから、結果的に良かったと思っています。

—お父さんがジャズ・ピアニストでしたら、ピアノだけでなく当然ジャズも身近に？

佐伯：はい。幼少の頃から父が出ているジャズ・ライブに行っていました。タイガー大越 (tp)さんのステージが多かったと記憶しています。子供ですから、ジャズ云々といった難しいことは解っていませんが、解らないなりに楽しくて、ライブに行くのをとても楽しみにしていたのを覚えています。

—尊敬するアーティストはビル・エヴァンス(p)とキース・ジャレット(p)だそうですね。

佐伯：父がエヴァンス好きで、家にLPやCDがたくさんあったんです。なので、ジャズはまず、ビル・エヴァンスから入りました。好きになった最初のジャズ・アルバムは「ビル・エヴァンス・トリオ・ウィズ・シンフォニー・オーケストラ」です。

—クラウス・オガーマン率いるオーケストラと共に、バッハやショパンの曲を演奏した異色のアルバム(1965年録音)ですね。

佐伯：クラシックの雰囲気壊さずとなく、でもちゃんとジャズのサウンドになっているところに惹かれたのだと思います。キース・ジャレットは、学生時代に、トリオで行なわれたライブを観に行き、すっかり虜になってしまいました。他に、武満徹さんと

吉松隆さんのサウンドも大好きです。

—ジャズの、どのようなところに魅力を感じていますか？

佐伯：やはり即興演奏ですね。あと、それとは対照的に、私が譜面に書いた音遣を演奏者の解釈で演奏してもらえるのも、作曲している上で大きな魅力のひとつになっています。たとえば、前作「アナベル」のディスク2は、それが実現できたんです。

—では、佐伯さんにとってジャズとはどのような存在？

佐伯：昔からの憧れ。外から傍観していた時期が長かっただけに最初は手探り状態でしたが、今は模索しながら、そしてこれからもずっと追いかけ続けるモノだと思っています。

—ライブも精力的に行なわれているようですが、2歳の娘さんを育てながら演奏活動をしていくのはとても大変だと思います。その辺のバランスはどのように？

佐伯：確かに子供ができてから、自分の時間が激減したことは事実ですが、家族や周りのみんなに助けをもらい、なんとか練習時間を確保するようにしています。ただ、出産当初まではピアノの前に座らないと練習できないと思い込んでいたので、精神的にも苦勞しましたが、最近はピアノがなくてもできることを積極的に取り入れるようにしています。

—お母さんになって、音楽に対する見方、捉え方などは変わりましたか？

佐伯：出産は私の人生においてとても大きな出来事でした。その経験をしたことで、以前よりも肝が据わった気がしています。そうそう、最近、娘が私の手を取って「踊ろうよ!」と言ってくるんです。それで、曲をかけながらリズムに合わせてクルクル回ったりして遊んでいるんですが、どうやら娘は純粹に音楽を楽しんでいるんですね。その姿を見て、私自身も単純に音楽を楽しむことを改めて教えてもらっているように感じています。

—今後、どのような音楽家でありたいと考えていますか？

佐伯：演奏者であると同時に「作曲家です」と胸を張って言えるように、今の活動を続けていきたいですね。たくさんの方に私の音楽を聴いていただきたいですし、そのための努力はできる限りするつもりです。